金光教の声

（平成21年1月～3月放送分）

No.386

【目　次】

神も助かり、氏子も立ち行く／佐藤　光俊・・・・・3

わが身、わが一家を練習帳に／松本　信吉・・・・・7

光りの中で／大倉　清子・・・・・・・・・・・・・11

乳ガンの手術を待ちながら／三矢田　光・・・・・・15

キジバト／小林　眞・・・・・・・・・・・・・・・19

生命ってすばらしい／辻井　学・・・・・・・・・・23

神様からの応援歌／平阪　真太郎・・・・・・・・・27

恩を知るということ／金光　浩道・・・・・・・・・31

川を渡る／岩崎　弥生・・・・・・・・・・・・・・35

神様からのサイン／冨増　彰生・・・・・・・・・・39

お礼の心／三宅　史子・・・・・・・・・・・・・・44

今一番大切なこと／谷口　余志子・・・・・・・・・48

神も助かり、氏子も立ち行く

佐藤　光俊

平成21年の新春を迎え、明けましておめでとうございます。金光教では、教祖金光大神様御立教150年のお年柄の新年をお迎えして、一層に感銘を深くしております。

この道の教祖様と私共が仰いでいます金光大神様は、今から150年前の安政６年、「自宅に天地金乃神様をお祀りして、参り来る人々に、神の教えを取り次ぎ、世間の難儀をしている多くの人々を助けてやってくれ」との神様からのお頼みをお受けになったのであります。そして神様は、このことが実現すれば、「神も助かり、人も立ち行く」ことになる、とも仰せになったのであります。

金光大神様は、ご自宅を「広前」として、人々に解放なさり、昼夜を問わず、参り来る人々の願い事を神様にお願いして、神様のみ教えを参拝者に諭し、人々に助かりの道を示されたのであります。このようにして始められた信心の営みとその内容は、神様と人間との信仰で結ばれた本来の関係を示されたものでもあります。

私は先日、アフガニスタンの難民キャンプに収容された人々を撮影した写真に接したのでありますが、そこには、３人の親子の姿が写し出されていました。母親に抱かれた弟らしき一人の子ども、その体は骨が浮き上がり、手足は枯れ木のようにやせ細

って、最早手足を動かすことも叶わぬかと思えるほどなのに、お腹だけは異様に大きく腫れて、栄養失調の症状かと思われました。母親の目は虚ろで、空腹の余り母乳が出なくなって久しい様子がありありと見られたのです。

妙に眼を引いたのが、粗末な布を敷いて体を横たえた、上の子とみられる4、5歳位の男の子で、その眼（まなこ）が、瞼に焼き付いて私の心をつかんで放さないのです。

その子は、下の子同様に痩せ細り、頭も頭蓋骨にわずかに皮膚が覆っている程度で、その皮膚も張りはなく眼の回りも皺だらけの老人を思わせるのに、眼だけは大きく澄んで鋭く、どこまでも静かではあるが、どこか私の心に突き刺さるものがあったのです。何かを訴えるかのような、淋しさとも、不安感とも、絶望感とも言える憂いと怒りを含んだ眼差しなのでした。

20年以上も続く内戦、何十年ぶりかの大干ばつは、その中で昼間は45度にもなる灼熱、1月には零下25度ともなり、死者が数多く出るその中で、戦禍に見舞われ、家を壊され、父親を亡くして、最低限の食料も得られず、座して死を待つだけの命の叫びと言えば良いのでしょうか。

その叫びは「ぼくに何の責任があるというのか、子どもには敵も味方もいない、自分は何のために生まれて来たのか、誰か答えてくれ」と訴えているようでもあります。

さて、そうした思いを心に、自分の正体を見てみ

ると、生きる基盤や環境は、真にぜいたくの極みでありながらも、何と不確かで危ういものかと、思わざるを得ないものがあります。

教祖金光大神様の教えの一つに、次のようなものがあります。

「人間は、万物の霊長じゃというが、その霊長は何から出来たか、知っておられるかな。それは母の体内で作られたに相違ないといっても、人間の分別で作ったものではない。食物は人間が作ったというても、人間の力でも肥料の力でもなく、天地の御恵みの外から、生まれて来る所はないのでありますからのう。そうすると、人間は万物の霊長というても、まだその上に、天地がござっしゃることを忘れてはなりませんのう。子どもが恩を知らぬというて嘆く親があるが、天地の神の御恩を忘れておっては、みだりにはいえませんことであります」

このみ教えは、紛れもなく天地の神様と人間の間柄を諭されたものであります。

今日の世界・社会は、地球的規模で進む自然破壊、宗教や民族の対立による世界観の対立や武力行使と罪なき人々の殺りく、さらには相次ぐテロ事件や核兵器開発・拡散など、個人の生命や平和を脅かすさまざまな問題を抱えております。国内に目を向ければ、食の安全を脅かす出来事の続出、家庭の崩壊や心の病のまん延、人命を軽視した事件の続発、社会的不正の頻発（ひんぱつ）やモラルの低下など、社会不安はふくらむ一方であります。

こうした問題の元には、グローバリゼーションや

貨幣（かへい）に換算されるもののみが価値を持つという経済至上主義の行き過ぎがもたらした単一価値観の支配や優勝劣敗の競争社会の原理が当然とされる傾向にもその一端が見られます。

普通のことが普通にできることへの喜びや意味が見失われてきていると考えるのは、私だけでしょうか。それらは、「丁寧」「親切」「まごころ」を尽くすことや、他人を思いやることなど、それらの大切さは、言葉さえも死語になったのかと思われる現実の有り様とも重なっているのではないかと思われます。

そして、どこかで自分だけは楽をして良い目を見たいとする功利的な思いは大人、子どもを問わず共通のものとなっているようにも見えるのであります。ですから、人間をそこに住まわせ、生かし育む天地の力、あるいは、そうした神と人との本来の間柄とその信仰的意味を承服させるべき信心の言葉は、いよいよ人々の心に届かなくなってきているのではないでしょうか。

しかしながら、例えば先にみたみ教えの一端に触れる時、現代人でも深く納得もし、容易に理解できるみ教えの数々を私共は頂いてきていることに改めて気付き、感じ入るのでありますが、このような信心によってこそ、初めて眼（まなこ）を開かされる真実と出会っているのでもあります。このようなご内容をはっきりと頂いていくところから、「助かり」の内容が我が身の上にいよいよ明らかになってくるのであります。

どうぞ、人間が神によって助けられるということばかりではない、それが、同時に「神も助かる」と言われる内容の生き方となるよう願いを込めて、新年のおよろこびを申し上げます。

わが身、わが一家を練習帳に

松本　信吉

「お母様、もう次郎さんとやっていく自信がありません！　私はお母様のようには出来ないんです！」

加藤良子さんは65歳の専業主婦。会社を経営していた５つ年上のご主人との間に、長男、次男をもうけ、長男は、ご主人の会社を引き継ぎ、次男も世間にも名の通った企業に勤めています。

３年前のこと。次男の嫁から、突然、離婚話が飛び出しました。

次男は、父親に似て亭主関白。子どものことはお

嫁さんに任せきりで家庭を顧みず、「仕事だ」「付き合いだ」と言っては、家に1週間も帰ってこないことがよくあるといいます。

それでも、何とかやってくれていると思っていたので、お嫁さんからの、突然の発言に良子さんは戸惑いました。

そして良子さんは、事の次第をいつもお参りしている金光教の教会の先生に聞いてもらうことにしました。すると先生からの答えは意外なものでした。

「良子さん、あなたが改まればおかげが頂けますよ」と。「あなた方はおじいさんの代から熱心に金光教の信心をされてきましたね。あなたはご主人によく仕え、二人の男の子も立派に育て上げ、ここまでほんとうによく頑張ってこられました。しかし、私には前から気になっていることがあったんです。あなたは、ご主人に反発することがほとんどありませんでした。ご主人は自ら会社を立ち上げたワンマン社長で、家でも絶対的な存在。あなたはそれに『はい、はい』と仕えてこられました。ご長男はそんな父親のやり方を反面教師として、反抗しながらも会社を継承された。今は会社の雰囲気も随分と変わってきているというじゃありませんか。しかし、ご次男は、権威的な性格をそのまま引き継いでしまわれた。あなたが若いころは、それでもやってこれたかもしれません。でも、今のお嫁さんはそうはいかないんですよ」と。

良子さんは「では、次郎にそのように話をいたします…」と返答しましたが、先生は「それだけでは

ダメなんです。良子さん、あなたも変わらなければ…」と。

「私が変わらなければ…？」。戸惑いながらの帰り道、駅に張ってあった一枚のポスターが目に留まりました。ママさんコーラス発表会のポスターです。そこには楽しそうに歌っているママさんたちの生き生きとした笑顔がありました。

「これまで私は主人に黙って付いていけばいいと思っていた。しかし、心の底では『もっと生き生きとした自分を見つけたい、もっと自分らしく生きたい』と思っていたはずだ。いったい、自分らしく生きるって、どういうことだろう？」

良子さんは、その翌日、次男の家族が住むマンションを訪れました。お嫁さんの瑞樹さんは、次男と大学時代の同級生。恋愛結婚して10年。授かった一男一女もすくすくと成長していました。

「瑞樹さん、私からも次郎に話すわ。だから、これからはありのまま話して。それと、私も生まれ変わるわ。主人にもズバズバ物を言って、好きなことにどんどんチャレンジするの！」。「お母様がそうして下さると心強いわ。私もお母様のように、黙って次郎さんについていこうとしていたけど、それだけではいけないのね…。私も次郎さんにもっともっと言わせてもらいます。それと子どもも大きくなってきたし、私も取りたかった資格にチャレンジしようかしら」と瑞樹さん。

それからの良子さんは、ご主人にも自分の考えていることをどんどん話すように努めました。今はご

主人も隠居して、気ままな身です。最初はこれでいいのだろうかとも思いましたが、以前の亭主関白ぶりは、少しずつ和らぎ、良子さんは自由な時間が増えて、以前からやってみたかったコーラスサークルや俳句教室にも通うようになり、友達も増え、サークルの世話役まで努めるようになりました。

一方、ご主人も、元々好きだった写真の趣味に没頭、孫の写真でコンテストにも入賞しました。また、夫婦で旅行を楽しみ、ご主人は風景写真を、良子さんは思い出を俳句に残すようになりました。

以前は、夫の影を踏まず、三歩下がってついていくタイプの良子さんでしたが、今では見違えるように胸を張って、生き生きとしています。昔の良子さんを知っている人たちは、その変身ぶりに驚きを隠せません。

しかし、誰よりビックリしているのは良子さん自身なのです。こんなに生き生きした自分がいるということを、60歳を過ぎて初めて発見したのです。しかも、きっかけは次男の離婚騒動からだったのです。

金光教に「わが身、わが一家を練習帳にして、神のおかげを受けて人を助けよ」という教えがあります。

時代社会の変化に伴い、家族の在り方も変化していきます。「これでよい」という家庭の在り方は、もしかしたらないのかも知れません。「わが身、わが一家を練習帳にして、親も子も嫁も孫も共に育っていかなければならない。そして、同じように悩んでいる人たちが世の中にはたくさんいるだろう、そ

の人たちのお役に立ちたい」と良子さんは思いました。

今では次郎さんも、瑞樹さんの話を聞くようになり、家にもきちんと帰って、子どもたちの面倒もよく見るようになりました。瑞樹さんも、子育ての合間を縫い、医療事務の資格を取って、パートを始めました。

そして良子さんは次男の離婚危機を乗り越えると共に、生まれ変わった自分に目覚め、時折、サークル仲間の人生相談相手も務めながら、豊かな老後を送っています。

「今こそ、あなたが生まれ変わるチャンスよ！　もっともっと人生を楽しまなきゃ！」。今日も、仲間を励ます良子さんの元気な声が聞こえてきます。

光の中で

大倉　清子

手を合わす　手を合わす　昇る朝日に手を合わし
沈む夕日にこうべを垂れて　瞼（まぶた）を閉じて
手を合わす

今日一日のいのちの重みに手を合わせ　今生かされている喜びに手を合わす

この時、このいのちをかみしめながら

「おじいちゃん、もうおうちに入ろう」

おじいちゃんは11月のまだ明けない東の空をずっと見つめたまま、家の前の橋のたもとにかがみ込んでいる。

私二十歳、おじいちゃん89歳。今から18年前の話だ。私がおじいちゃんと暮らすことになったのは、母の実家である金光教の教会に、結婚した主人と一緒に後継者として入ったからだ。

おじいちゃんは、今で言う認知症が始まっていた。

「おじいちゃんはとても厳しい人だった」と聞いた。皆がその一挙一動で震え上がるほどだったと。けれど、私たちと暮らし始めたころはそんな面影もなかった。昼夜の区別もつきにくく、いきなり小学生に戻ってしまったり、いつも「ご飯を食べていない」という、少し困った可愛いおじいちゃんだった。

「ねぇ、おじいちゃん、冷えてきたよ。おうちに入ろう？　私寒いよ」。そう言っても、ガンとして動かない。体の大きなおじいちゃんを、身重の私が動かせるはずもなく、仕方なく、傍らで私もジーッと東の空をにらみながら、一緒にかがみ込んでいた。白々と空が明るくなり、太陽の光の線が見え出したころ、おじいちゃんは「ほーら、お天道様やで。ありがたいなぁ。今日も変わらず昇って下さる」と、嬉しそうに手を合わせる。「あ、ほんまや。奇麗な朝日やね」と光の線に目を細め、私は少しホッとする。

これでやっと家に入ってくれる。そう思った矢先「さぁ、田んぼへ稲刈りに行くで」と、私の手を引っ張る。「おじいちゃん…、田んぼは私が後で見に

行くから…もう寝ようよ」。「そうか…あんた見に行ってくれるか？」と、あるはずもない田んぼのことを気にするおじいちゃん。今は何とか納得させて、私は布団に入りたかった。

おじいちゃんは昔と今を行ったり来たりする。その見極めが難しかった。「おじいちゃん」と呼ぶと怒る時もある。そんな時は「今、何歳ですか？」と聞いてみる。すると、20代と言ったり10代と言ったりする。私の顔を忘れて「アンタ誰？」とか、小学校の先生と間違えて「先生」と呼ぶこともあった。

そんなおじいちゃんを、おばあちゃんはいつも怒る。怒っても仕方がないのに…と、私はため息をつくのだけど、「今まであんなにしっかりしていた人が…」と、情けなさでいっぱいなのか、おばあちゃんはいつもおじいちゃんを怒るのだ。

例えば、夏の暑い時には、おじいちゃんは冷凍庫に頭を突っ込んでジッとしている。それを見かねた夫がアイス枕を出してきて「おじいちゃん、これが冷たくて気持ちいいですよ」と教えると「これはええなぁ。気持ちいいなぁ」とものすごく喜んだ。

翌日おじいちゃんの部屋から、また、おばあちゃんの怒鳴る声が聞こえてきた。何事かと見に行くと…。おじいちゃんの枕の上にうどんが散らばっている。

……なんで？　どうも…冷凍庫にあった凍ったうどんをアイス枕と間違えて頭に当てていたらしい。無残に溶けて、ぐちゃぐちゃに散らばったうどん。その横で怒鳴るおばあちゃん。シュンとしているお

じいちゃん。

火の粉は、私たちにも飛んできた。「あんたらがいらんこと教えたりするから！」と、ドスドスとおばあちゃんは怒って行ってしまった。おばあちゃんのそんな後ろ姿に私はため息をついたけれど、おじいちゃんは違っていた。おじいちゃんは怒るおばあちゃんの後ろ姿に手を合わせて「ありがたいなぁ。すまんなぁ」と祈っていた。

私はハッとした。色々と分からないこと、出来ないことが増えてしまったおじいちゃん。けれど、「祈る」ということだけは、決して忘れていなかったのだ。「一体これは何…？　自分をしかりとばした人の後ろ姿を祈るのは、なぜ？」。

「このおじいちゃんの相手のことを思いやったり、感謝したり、心からありがたいなぁと思える心。これが神様の心なんだ」。

私はおじいちゃんの純粋な思いの中に神様を見たような気がした。「どんな風に自分が変わっても、変わらないものがここにあるんだ」と改めて思い、おじいちゃんの姿に感動した。

すっかり朝日が昇りきってしまった。おじいちゃんはまだ動かない。というか、ここでウトウトし始めた。困った…。

輝く朝日の中で私は途方に暮れながら、自分の手を合わせてみた。何か…温かいものが体中を駆け巡る。

18年経った今でもよく思い出す光景だ。願うこと、祈ること、そして何よりありがたいと思い、手

を合わせられること。そこには何かしら温かい光が見えてくるように思う。

おじいちゃんのその姿を思い出しながら、今日も私は手を合わせ、祈り続ける。自分の中に神様が生まれることを願いながら…。

手を合わす　手を合わす　昇る朝日に手を合わし
沈む夕日にこうべを垂れて　瞼を閉じて手を合わす

今日一日のいのちの重みに手を合わせ　今生かされている喜びに手を合わす

この時　このいのちをかみしめながら

乳ガンの手術を待ちながら

三矢田　光

シズコさんは、今年68歳になる、心の元気な女性です。開けっ広げで温かいシズコさんは、職場でも地域でも人気者です。毎日教会にお参りして、知り合いの人たちのことを神様にお願いします。心配事があっても、それに押しつぶされることなく「まあ、神様がええようにしてくれますやろ」と笑うのです。

そんなシズコさんには、大きな転機がありました。15年前のことです。胸にしこりを感じて検査を受けたところ、乳ガンと診断されました。すぐに手術しなければならないのですが、順番待ちで、結局1カ

月半の間待ちました。

シズコさんは、少し年上のご主人と、暮らしていました95歳になるご主人のお母さんも、同居していました。ご主人は洋服などを縫う職人さんで、自宅で仕事をしていました。お母さんは寝たきりで、シズコさんはご主人と力を合わせて、そのお世話をしていました。

手術を待つ日々は、不安と苦しみの日々でした。

「うちはいったいどないなるんやろう。死ぬかも知れへんなあ。死んでしもうたら、どないしよう。恐いなあ。嫌やなあ。それに、うちの人とお母はんは、どないなるんや。うちらには子どもが無い。今かて二人で力を合わせて、ぎりぎりなんとか生活しとる。うちがおらんようになったら、どないしようもない。ご飯かて作る人が無い。困ったなあ。嫌やなあ。でも死ぬんかなあ」。考えるほどに心配は募り、シズコさんは、真っ暗な心を引きずって、泣きたいような気持ちで過ごすようになりました。

毎日の家の用事は、放っておくわけにはいきません。でも、そんな状態ですから、何をしてもしんどく、つらく、いつもの何倍も疲れるのです。

たまらずシズコさんは教会にお参りします。先生のお話を聞いていると、だんだん心が落ち着いてきます。しかし、帰ってしばらくすると、また不安が膨れあがってきます。また教会にお参りしてお話を聞かせてもらいます。少し落ち着いて帰ります。そんな繰り返しの中、ある日、先生から、こんなお話を聞きました。

「なるほど、あんたは不安やなあ。不安になるだけの理由がある。自分自身の命がどうなるか。もしも自分が死んだら家族はどうなるか。手術を受けてみんと、どうなるか分からんしなあ。けどなあ、今はどうなんや。今は生きとるんやないか。毎日朝が来れば目が覚めて、体を動かすことが出来る。家のことも毎日きちんきちんとさせてもろうとる。物を食べればおいしいし、空気を吸えば気持ちええ。血液は体中を巡って栄養を送り届け、目が見え、耳が聞こえ、ご主人や友達と話が出来、お母さんのお世話が出来とる。今日一日は、誠に結構に過ごさせてもらっとると、私は思うんやがなあ。その賜っておる結構な一日を、先の心配で曇らせてしまうというのは、これはもったいないことやと思うんやがなあ。教祖様は、『おかげはわが心にあり。今月今日で一心に頼め』と教えて下さっとるやろ。今日という日をどういう一日にするかは、あんたの心次第や。和らぎ喜んで今日を味わう心にならせて下さいと、神様にお願いしていったらどうかなあ」。

この言葉は、シズコさんの胸の深いところにストン、と降りてきて収まりました。

「確かにそうや。今日は、誠に結構な一日や。命を頂き、我慢出来んほどの痛みもなく、存分に働きをさせてもらっての一日や。心配ばかりするというのは、それをドブに捨ててしまうようなものなんやなあ。ほんまにそうや」と思ったことが、シズコさんの出発点でした。

でも、一度納得したといっても、心はフラフラと

揺れ動きます。そこを毎日神様にお願いし、お話を聞いていったのです。そうしていくうちに、本当に心の底から「あのお話の通りやなあ」と思えるようになりました。「何や、神様が後押しをして下さったような感じでしたわ」とシズコさんは言います。

そして、シズコさんは忘れていた笑顔を取り戻して、入院していったのです。

同じ時期に乳ガンで入院していた三人の女性が、シズコさんを見て不思議がります。「あんた、どうしてそんなに明るいん？　心配やないん？」。「心配に決まっとるがな。せやけどな、せやけど、今は生きとるやんか」。

シズコさんは、死ぬかも知れない病気にかかりましたが、家族やお医者さん、そして天地自然の仕組みは、シズコさんを助けよう助けようと、働いていたのです。ところが、心配や不満で心がいっぱいだと、自分を助けようとする働きを邪魔してしまうのです。

金光教の教祖様のみ教えの中に、「明日塩辛を食べるからといって、今日から水を飲んで待つわけにもいくまい」というお言葉があります。

塩辛というのは物の例えで、明日の心配で今日のいのちを曇らせ、今、すべきことに手がつかなくなったり、今喜ぶべきことが喜べなくなると、神様は働きにくくなるのです。まずは今日を大切にする。そういう心にシズコさんがなった時、いろいろなことがうまく回り始めたのでした。

シズコさんも他の三人も手術は成功しました。そ

の後も、シズコさん夫婦を数々のピンチが襲いましたが、その度にシズコさんは「まあ、神様が何とかしてくれますやろ」と笑顔を見せます。そして、その通りになってきているのです。

「あん時乳ガンしといて、ほんまに良かったですわ」。それが最近のシズコさんの口ぐせです。

キジバト

小林　眞

わが家の庭にキジバトが産卵するようになって、20年近くになった。数年前のこと。まず一度目の産卵は、いつもヘビくんがウロウロしている、生け垣の中だった。「そんなところに巣を作ったら、すぐにやられてしまうよ」と、何度も忠告してみたのだが、残念なことに言葉が通じない。案の定、卵を抱き始めて、2、3日後には、もう卵は見当たらなかった。だが、それくらいのことで、やはり彼らはくじけたりはしない。すぐに二度目の産卵だ。今度はいつもの藤棚の上。ところが悲しいかな、やはり結

果は同じだった。

何が気に入ってやって来るのか、彼らは毎年のようにやってくるのだが、この庭で子供がちゃんと育ったのは「たったの二羽」だけなのだ。それでも健気に巣を作り、産卵する彼らを見ていると、やってはいけないと思いながらも、ついつい肩入れをしてしまった。それは、電柱の支線についている、あの黄色のヘビ返し。ボール紙でそれを真似て作り、棚の支柱に取り付けてみたのだが、果たしてそれが功を奏してかどうか、三度目の産卵では、見事にヒナになるまでこぎつけたのだ。だが、それから先が問題だった。

たいていの場合、ほ乳類と違って、鳥類は番（つがい）で子育てをする。ところがある日、片方の親がいなくなったのだ。私は心配になった。いなくなったのは片足の悪かった方だ。何かトラブルでもあったのだろうか。それとも、「子育ては番でするもの」と私が勝手に思い込んでいただけで、ヒナがある程度まで大きくなれば、オスなのかメスなのかは分からないが、片方の親は子育てから離れるようになっていたのだろうか。

それでもヒナたちは、日増しにぐんぐん大きくなり、必死で親鳥に餌をねだっている。親鳥はそれに応えるように、一羽きりで、せっせと餌を運んでいる。

記録的な猛暑の中での子育て、おまけに一羽での子育てとあっては、さすがにきつかったのか、ある日気が付くと、餌を運ぶのをやめて、一日中巣の近

くの日陰でぐったりとしているではないか。相当疲れているのだろう、私がすぐそばに近づいても、逃げようともしない。

「まさか」。私は急に心配になった。すぐに巣の中をのぞいて見ると、思った通りだった。不安は不幸にも的中してしまった。何ということか、前の日まで元気に鳴いていた二羽のヒナたちは、頭を垂れて少しも動いていないのだ。息を潜めてしばらく見ていたのだが、ピクリともしない。「これはきっと夢に違いない」。私は見ていられなくなって、巣から離れた。「見なかったことにしよう」。

次の日、「きのうのことは気のせいに違いない」と自分に言い聞かせて、一縷（いちる）の望みを抱いて巣をのぞき込んでみたのだが、やはり状況は変わっていなかった。せっかく大きく育っていたのに、ショックだった。それでも、死んでしまったからといって、すぐに巣を片付ける気力など起きようはずもなく、それから3日後、いつまでもほうってはおけないと、暗い気持ちを引きずったまま巣を片付けようとしたのだが、そこにはまさかの展開が待っていた。

改めて巣の中を見た時、私は我が目を疑った。中で何かが動いているのだ。ヒナたちだ。随分大きくなっている。確かに死んでいたと思い込んでいたヒナたちは、なんと、生きていたのだ。死んだようにジッとしていただけだったのだ。暑い昼間は、まるで死んでいるかのようにして、体力の温存を図っていたのだろうか。もちろん、外敵から身を潜めると

いうこともあったと思う。

親にしてみても同様で、ヒナたちへの餌やりも暑い日中の時間帯は避け、早朝の涼しい間にしていたのだろう。「自然には逆らわない」。これが、厳しい自然の中で生き抜く鉄則だったのだ。

しかし、安心したのもつかの間、それからがまた大変だった。

その後、台風の直撃を受けた巣は、片方のヒナを藤棚に残し、一羽のヒナと共に地上に落下してしまったのだ。それでも私は、今度こそ手出しするのを我慢して、事の成り行きを黙って見守ることにした。

案の定、私の心配をよそに、落下したヒナはたどたどしい足取りながらも、雨風の当たらない場所まで自力で移動していった。まだ飛ぶことはできなかったが、幸いなことに、歩き回れるまでに成長していた。

外敵、猛暑、台風と、確かに自然の中での子育ては大変だ。そのことを考えているうちに、「今までに、たったの二羽しか育たなかった」などという私の考えは、浅はかだったと思うようになった。本当は厳しい自然の中では、「今までに、二羽も育った」というのが正しいのではなかったのか。それに産卵する度に、ヘビに卵やヒナを食べられてしまうくせに、それでも産み続ける彼らを見ていて、私は最初の頃、「性懲りなくまた産んでいる」などと思ったことがあったのだが、それもまさに、人間のおごりきった考えだった。彼らにしてみれば、ただひたすら、天地という無償の愛に抱かれて、生かされるま

まに生き、おかげで授かった生命を必死で守ろうとしているだけだった。

確かに、人間と彼らの生活とでは大きく違う。それでも、子育てということにあっては、それがたとえ命がけであったとしても、そこには欲も得も、そんな打算めいたものは一切存在することのない世界だったのだ。

やがて二羽のヒナたちは、枝の上と地上とで無事に飛べるまでに成長した。それを見届けると、命がけの子育てなどまるで何もなかったかのように、親鳥は静かに姿を消してしまった。

親の愛もまた、いかなる場合でも、子どもに対して何の見返りも求めない、無償の愛だということを改めて思い知らされた出来事だった。

生命ってすばらしい

辻井　学

現在、私たち夫婦の間には中学3年生になる娘と、中学1年生になる息子の二人の子どもがおります。これは、その娘の出産時の出来事です。

出産予定日を直前に控えた、とある昼下がりのことです。妻が突然、「破水した！　すぐに病院に連れて行って」と、そばにいた私に訴えてきました。私も突然のことに戸惑いながらも、すぐに車を用意し、妻を乗せ、かかりつけの病院に急ぎました。

病院に着いたものの、そこからがまた難産で、結局、娘が産声を上げたのは、次の日の朝、夜も白み

かけてきたころのことでした。私たちにとって、待望の第一子がこの世に生を受けたのです。

ところが間もなくして、主治医の先生から私は呼び出されました。元気そうに見えた娘でしたが、検査の結果、心臓に異常が発見されたのです。心拍数が正常値の2倍もあり、このままでは24時間はもたない、との診断でした。「心拍数を抑える効果の期待される薬を投与します。一刻も早く効き目が現れて、心臓が正常な状態に戻ってくれることを願います」とのことでした。

無事に生まれてきてくれたことを喜びあったのもつかの間、そのいのちがあとわずかで消えてしまうかもしれないとの話に、私たち夫婦は、がく然とさせられました。とはいえ、私たちにはその時、この子のためにしてやれることなど何もありません。「とにかく、今は神様にお願いさして頂くしかない」。そう二人で話をし、妻は病院のベッドの上で祈り、私は急いで自分が奉仕させてもらっている金光教の教会に帰り、その神前で、娘の回復を神様に祈り続けました。

その日の夜の9時半頃です。教会の電話が鳴り響きました。電話の主は、病院の看護師さんでした。「お父さん、喜んで下さい。娘さんの心拍数が正常値に戻りましたよ！」。こちらがどれほどか心配しているであろうと、看護師さんがすぐに連絡をくれたのでした。

私はホッとすると同時に、急いで神前に戻り、神様に「ありがとうございました。ありがとうございい

ました」と、何度も感謝の言葉を口にしていました。

その日の夜は、おかげで二日ぶりにぐっすりと休ませてもらうことが出来、翌日、病院の面会時間に、私は足早に妻と娘の元に行きました。娘は保育器の中で注意深く経過を観察されていましたが、周囲のドタバタをよそに、スヤスヤと心地良さそうに眠っていました。その穏やかな寝顔を見て、ようやくお預けになっていた我が子誕生の喜びを、改めて妻と２人で噛み締めさせてもらったようなことでした。

娘の心臓は、その後、何度も検査を受けましたが、これ以降はまったく異常もなく、今日に至るまで、確かな鼓動を打ち続けてくれています。

病院の検診の間隔も次第に長くなり、いつしかこの件で病院を訪れる必要もなくなりました。あまりに元気に日頃飛び回る姿を見ていると、娘の心臓にそんな異常があったことを忘れてしまうほどに、日々は積み重ねられていきました。

毎年、娘の通う小学校では秋になると、持久走大会が催されます。その直前には保護者に必ず健康診断表が配られ、いくつかの質問項目に答えることになっています。過去の病歴に関する中には心臓の項目もあり、そこに、「生後こういうことがありました」と記入する度に、改めて妻と共に、本当によくぞここまで無事に育ってくれたものだという感慨を新たにさせられるのです。

我が子たちははっきりいって親に似て、二人とも運動オンチで、こうした持久走大会などでも、いつも順位は下から数えるとトップクラスです。しかし、

まずは元気で走ることが出来たということだけで、とにかく「ありがたい」という思いを抱かずにはいられませんでした。ましてや「完走できたよ！」という報告をうれしそうにしてくれると、それだけでこちらも、例えようもなく嬉しい思いになります。

それと共に、考えさせられることもあります。日頃、娘の心臓は何の支障もなく、常に正しいリズムを奏で続けてくれています。こうした機会がないと、この病気のことを忘れてしまうほどです。

結局、この病気は何が原因だったのか、今もってよく分かりません。こうしたトラブルに娘が見舞われましたが、誰でもそれぞれの命は、それこそちょっとした歯車の食い違いで、いつどうなるともしれない危うさを秘めているのです。いのちとは、そんな微妙なバランスの中で、それこそ人智を越えた果てしない天地の働きによって保たれているということを、つくづく思い知らされます。

金光教の教えには「痛いのが治ったことだけがありがたいのではない。いつも健康であるのがありがたいのである」とあります。

健康であるということ…、元気な時はつい何事も当たり前のように思いやすいものですが、決してそうではないのです。その当たり前の状態が保たれていくために、どれほど大きな天地の恵みと働きが注がれていることか。改めて、私たちの生命というものの不思議さ、尊さ、そしてそれを生かし続けて下さっている天地の偉大さを実感せずにはいられません。

こうして気づかせてもらった事柄を、妻も私も、そして子どもたちも、それぞれが少しでも日々の生活の中で見失わないよう心がけ、常に、今、生かされて生きている喜びを本にした生き方を、しっかりと歩ませてもらいたいと思うのです。

神様からの応援歌

平阪　真太郎

私がある喫茶店でアルバイトをしていた頃のお話です。マスターは、本業を他に持っていて、そちらが忙しくなると、喫茶店には顔を出せない日も多くあり、私はその都度、お店を一人で任されました。しかし、1時にどっと大勢のグループ客が入ってくることもしばしばあり、複雑なメニューの注文が重なると、とても一人では対処出来ません。助けを呼ぼうにも誰もいません。そんな時、私は必ず「神様、応援して下さい！」と、心の中で祈りました。

というのも、私は金光教の教会で生まれ育ち、両

親から「何をするにも神様にお願いしてからさせてもらいなさいね。神様が力を足してくれるから」と教えてもらい、お願いすることが自然と身に付いていました。この喫茶店でも、「一人ではなく、神様と一緒に仕事をさせてもらおう」と取り組んでいました。すると、とても一人で対応しきれないようなことが、スムーズに出来てしまうのです。そんな光景を見ていた常連のお客様にはよく感心されました。

しかし、そうして褒められると「俺ってすごい！」と、まるで自分の力で出来たかのように錯覚してしまいがちでした。おもしろいもので、そういう慢心が出ると、何でもない時に大きなミスをしてしまうのです。

「慢心は大怪我のもと」という金光教祖の教えを、身をもって体験させてもらいました。

ある時、大人数のお客さん、異なる注文に、店内を駆け回り、何とかクレームもなく終えてほっと一息。「あー、疲れた」と椅子に座ってタバコに火をつけ、片付けを後回しにして先に一服したのです。その瞬間、マスターが外出先から帰ってきました。「しまった！　さぼっているみたいに思われてしまう！」と思いましたが、もう手遅れでした。マスターは黙ってお盆を手に取り、そのままにしていたテーブルのコップなどを下げ、無言のまま出て行ってしまいました。その背中は明らかに怒っているようでした。「ずっと動きっぱなしやったから、先にちょっと休憩しただけやのになあ…」と思いながらも、

私はとても落ち込みました。

その後、お客さんが帰り、一人になりました。お客さんがいない時には、これまでも、掃除はもちろん、目立たない所など隅々まで磨いたりしていました。それは、指示されてではなく、良い条件で働かせてもらっている恩返しのつもりでした。この時も、私は雑巾とワックスを持って磨いていきました。ところがしばらくして、いつもと違う感情が湧いて来たのです。「こんな目立たん所一生懸命磨いても、マスター、どうせ気付いてくれないやろなあ…」「マスター、こんな時、ひょこっと顔出してくれへんかなあ…」。外をちらちら見ながらの作業になっていました。

そう、さっきの失敗もあるから、名誉挽回したいと思っていたのでしょう。いつしか、無償の恩返しではなく、マスターの顔色を窺うようになっていたのです。結局、マスターは現れず、諦めて一服。すると、またしても、その瞬間にマスターが登場…といった具合に、悪循環極まりありません。

「何で、よりによっていつもこんなタイミングに現れるんやろう…」。このようなことが何度か続き、私はマスターの信頼も失い、行き詰まってしまいました。これまでの自信はどこへやらです。

私は、ふと、これまでの人生を振り返りました。持ち前の要領の良さで、順風に過ごしてきましたが、それは一方で、人目を気にしながらの人生でもあったように思うのです。調子の良い時は、自分の力で出来たと喜び、悪い時には極端に落ち込みました。

人目を気にして行動し、思いが左右されてしまう自分が嫌になってきました。

そして、これではいけないと思い、私は決心しました。「この仕事も、言わば、神様に紹介してもらったお仕事。だからもう、マスターが見ている、見ていないに関わらず、ただ神様から頂いた仕事に誠実に奉仕しよう」と思ったのです。お客さんは、神様が呼んで下さった人、そう思えば、どんな人でも大切に出来ました。とにかく、良いことも悪いことも、誰も見ていなくても、神様がご覧になっている。そう心を切り替えた時、これまでの薄モヤがすっきりと晴れ、清々しい気分になれたのです。

結果的に、マスターから絶大な信頼を得ることになりました。「おまえは、誰に対しても親切に接客してくれてるなぁ」「おまえは、いつも店内の隅々まできれいにしてくれてるなぁ」「おまえは、どこに出しても大丈夫な人間や」。そう、マスターは、私の仕事ぶりを見ていないようで、しっかりと見てくれていたのでした。

人に良いところだけを見てもらおうと心を削らなくても、神様がご覧になっていると思うと、人にも優しくなれ、起きてくる出来事にも不安なく、丁寧に対処出来る。そして、自分の心も清々しく、最終的には、人にも認めてもらえることになるのだなあと実感しました。確かに、私が経験したのはたった一つのアルバイトに過ぎません。しかし、神様は、このことを通して、何をするにも通用する普遍的な道理を教えて下さったように思うのです。

ラジオをお聴きの皆さん、今日一日、何をするにも「神様と一緒」という姿勢で過ごしてみませんか？そして、起きてくる出来事に耳を澄ませてみて下さい。きっと、温かい応援歌が聴こえてくることでしょう。

恩を知るということ

金光　浩道

先日、職場の後輩とご飯を食べに行く機会がありました。食べ終わって支払いの時に、一応僕は先輩なので、まとめて払いました。

次の日にその後輩が、昨日の分と言って、支払いの半分のお金を僕に渡してくれようとしましたが、その時に僕は、ふとある先輩のことを思い出しながら、「いいよ。今までいろんな先輩にたくさんごちそうしてもらってきたから、これからは後輩に返していかなきゃ」と言いました。

ふとその時に思い出したのは、僕が二十歳くらい

の若いころに、あるお店で会うと必ずごちそうしてくれる先輩がいたんです。その先輩が、「今までいろんな先輩にたくさんごちそうしてもらってきたから、今度は後輩に返していく番なんだよ。先輩たちにそう教わってきたから、ここの支払い分は、将来、後輩に返してくれたらいいから」と、よく言われていました。

ごちそうしてくれる、してくれないは抜きにして、僕はその先輩が大好きで、また、いろんなことを教わりました。そして、思い返してみると、そういえば「あの人にもごちそうになった、あの人にもすごくお世話になった」と次々と思い浮かび、「ああ、若いころは何にも考えずに、あっちにもこっちにも迷惑を掛けていたんじゃないかなぁ…」「考えてみたら、周りに甘えていたことが多かったけど、ちゃんとお礼は言ったかなぁ？」「ご恩返しができているかなぁ？」「お世話になった先輩方に、少しでも喜んでもらえるような生活ができているだろうか？」と思わせられたのです。

そんな中、お昼にたまたまテレビを見ていると、ある番組で、相手にお願いを聞いてもらうマル秘会話術という企画をやっていて、その中で「報恩性」という言葉が出てきました。人間の心理には、恩を受けたらそれにお返しをしたくなるという「報恩性」という行動原理が働くらしいのです。

恩に報いるという意味の「報恩性」という言葉は、僕自身、初めて聞く言葉でしたが、ちょうどその時の僕自身の信心のテーマが、神様のご恩を知り、ご

恩に報いるということでしたので、その言葉にすごく興味がわきました。

それと同時に思い出した、友人の面白い体験談があります。

仕事で出張の多い友人が、ホテルの予約なしで出張先に向かいました。何度も行っている所で、今までも当日にホテルを決めたことは何度かあったらしく、特に心配もせず軽く考えていたら、たまたまその日に有名な大きなお祭りがあり、どこを当たってもホテルは満室でした。困り果てて、最悪の場合は野宿も考えていたらしいのです。ところが、電話帳で探して最後にかけた旅館が、今は事情があって営業はしていないけど、「そういう事情ならば」と、特別に泊めてくれることになったのです。

その友人はとても喜び、部屋も備品もきれいに使い、さらには、今まで一度もしたことのない、風呂やトイレの掃除までして部屋を出た、と言うのです。

これが人間の「報恩性」というものなのかな、と思いました。恩に報いる心は誰にでも備わっているのでしょうね。

そもそも僕が恩について考えさせられるようになったのは、去年の長男誕生がきっかけでした。お医者さんは、産まれて間もない長男の様子を見て、「食欲もなく、便秘気味で体の調子が非常に悪い」と言われ、集中治療室に入ることになりました。そこで見た長男は、産まれて二日目にもかかわらず、お腹のガスを出しやすくするために鼻から管を通され、しかも栄養補給のために腕には点滴の針が刺さって

いました。

産まれたばかりのわが子の、とても痛々しい姿を見て、妻と共に涙が止まりませんでした。看護師さんは「これが赤ちゃんにとっては最善なんですよ」と言って下さいますが、分かっていても涙が止まりません。

「何とかしてやりたい」と涙を流しながら、ハッと思い付かされたことがありました。それは、「神様、そして両親は、これほどの慈愛をもって自分に接していて下さったのか！」ということです。

「子を持って知る親の恩」と言いますが、頭で分かるのと、実際の経験から体の芯にたたきつけられるように分かるのとでは、全く違うものですね。この時ばかりはそう思いました。そして、ありがたい思いでいっぱいになりました。恩というものを、わが子によって分からせてもらったわけですね。おかげでその後は、長男は元気にすくすく育っています。

この、ありがたい心にならせてもらうというのは、本当にありがたいことなのですが、先日読んだ金光教の本に、こういう話がありました。

「命の無いところを、信心しておかげを頂いて今日がある自分たちだから、いつ命が無くなっても、もう何の不足もない」というような話をしておられた方々に、ある金光教の先生が、「それは違う、あなたたちの話しておることは、非常にありがたいことのように思えるが、それは例えて言うなら、お金に困った人が、ある人に貸してもらって良い方向に向かった。元金も利子も払わず、それでご破算にし

てもらえれば、こんなありがたいことはない、と言うのと同じではなかろうか」と言われました。

つまり、神さまの恩を受けて命を頂いたのに、それに報いることもせずに、この世を去るのでは、あまりにも神様に申し訳ない、と言われるのです。

これを読んで、僕は、「ありがたい気持ちは自己満足で終わってはいけない。さらにその先、ご恩に報いる生活をさせてもらわなければいけないんだ」と気付かされ、ここから先の生活の上で生かしていけたらいいなと思っています。

川を渡る

岩崎　弥生

「はあー」

深いため息が病院の待合室で、聞こえます。若いお母さんが、2歳くらいの男の子をひざの上に抱え、疲れた顔をしていました。

「僕、どうしたの？　風邪引いちゃったのかな？」ため息が気になり、話しかけてしまいました。「僕」の代わりにお母さんが答えます。「中耳炎なんです。もう何度もかかっているんです」。

少し強い調子で「何度も」と言いました。「そうなんですか。大変ですね」と私が答えると、誰かに

聞いてほしかったのか、続けてこう話してきました。

「初めて中耳炎になった時、主人が出張で留守だったんです。夜中に急に泣き出し、おなかが痛いのか、頭が痛いのか、それとも虫に刺されたのか、ただただ大声で泣くばかりで。その時は主人の転勤でここに引っ越したばかりで、地理も分からず、知り合いもいなくて、私も一緒に泣きたくなりました。泣き疲れて子どもも私もそのまま寝てしまい、次の日、病院に行き中耳炎と分かったのです。その後も風邪を引いたかな？　と思うと中耳炎になってしまって」と言って、またため息をついていました。その姿を見て、私は自分の子育ての時のことを思い出しました。

10年前のその日、私も先ほどの若いお母さんと同じように、病院の待合室で3歳になった息子をひざに乗せ、ため息をついていました。

私たち夫婦は、すぐに赤ちゃんが欲しかったのですが、なかなか恵まれず、3年目にして授かった子どもでした。

今思えば3年は短い方と思えますが、授かるまでの3年間は長い長い日々でした。ですので、子どもを授かった時は本当にうれしく、神様から頂いたと心から思え、感謝の気持ちでいっぱいでした。生まれてからは順調にすくすく成長しておりましたが、そのころは風邪ばかり引いていました。

「今月はこれで3回目だなー」。病院にかかった日を指折り数え、ため息が出てきました。「どうしてこう病気ばっかりするのかなあ…。もう元気にな

ったのかと思って、昨日外で遊んだのがいけなかったのかな？　それとも、布団をけ飛ばしていたから…」。そんなことを考えていると、息子が余計にぐずぐず言い出し「少し我慢しなさい」と、つい怒ってしまいました。

「岩崎さん！」と呼ばれて診療室に入り、経過を報告しました。お医者さんが聴診器を胸に当て「ちょっと、ぜこぜこしています。ぜんそくを起こしていますね」とおっしゃいました。「やっぱり…」。私が余程がっかりした顔をしていたのか、お医者さんが紙を取り出し、話をしてくれました。

「お母さん、子どもが病気になることは悪いことではないんですよ。生まれたばかりは、お母さんからの免疫がありますので病気になることはあまりありません。でも、だんだんにその免疫が無くなり、色々な菌に感染し病気にかかるようになります。無菌室の中に閉じ込めているわけにいかないのですから当然です。自分のことを振り返ってみて下さい。小さいころはよく風邪を引きましたよね、でも最近はめったに引くことはないでしょう。そうやって、病気になりながらたくさんの免疫を作っていくのです」

お医者さんが紙に何本もの線を横に引きました。

「お母さん、病気になるということは川を渡るようなものです。簡単に一またぎ出来る小さい川もあるでしょう。もしかしたらおぼれそうになる大きな川もあるかもしれません。それらたくさんの病気の川を渡って抵抗力を付け、丈夫な体を作っていくので

す」と言って、紙に書いた何本もの線で出来た川を指して教えて下さいました。

そして、「だから、病気になるのは悪いことではありません。その病気にどう向かうのかが大事なのです。なるべく早く信頼出来るお医者さんに掛かり、処置して頂く。そして、何より大事なのは、お母さん、あなたが子どもと一緒に川を渡ることです」。

「一緒に川を渡る?」。「そうです。お母さんが一緒に、です。眠れない夜は、手をつないでそばにいてやる。痛い時にはさすってやり、苦しい時にはニッコリ笑って『大丈夫だよ』と言って抱きしめてあげる。そのことが一番の治療なのです。小児ぜんそくは厄介な病気ですが、治る病気です。一緒に川を渡って行きましょう」と言って下さいました。

私はその話を聞いて胸のつかえがスーッと取れて、目の前が明るくなった気がしました。神様がこのことを通して、私たち親子にたくましく育ってほしいと願って下さっているのだと感じました。

病気になるのが悪いんじゃない。どう向き合うか。そして一緒に川を渡る。今まで暗い顔をして子どもに接していたこと、思うようにならないことにいらだっていた自分を反省しました。気持ちが前向きになり、しっかり病気に向き合うことが出来ました。

その後、私たち親子は何度も病気の川を渡りました。ぜんそくが悪化し入院したこともありましたが、その都度、あの時のことを思い出し、手を取り合って川を渡りました。おかげさまで、お医者さんの言った通り、小学校を卒業するころには、ぜんそくの

発作を起こすこともなくなりました。そして今では、ラグビー部に入り身体もたくましくなり、雨の中の練習をしても風邪一つ引くことがなくなりました。

この話を若いお母さんに話すと、少し明るい顔になり、子どもをぎゅっと抱きしめ、お辞儀をして診察室に入って行きました。

改めて私自身、10年前を思い出し、「病気の時だけじゃない、今までどれだけ子どもに歩幅を合わせ、一緒に手を取り合って歩いてこれたかな」と思わされました。

神様からのサイン

冨増　彰生

今から数カ月前、コンタクトレンズを失くしてしまったので、新しく作りに眼科へ行きました。

いつもは簡単な検査があった後、お医者さんから処方箋（せん）をもらうのですが、今回は何だか随分検査が長いのです。

「どうかしたんですか？」と尋ねると、お医者さんはちょっと間をおいて「緑内障ですね。予想以上に悪いです。視野の上半分がほとんど見えてないようで、放っておくと少しずつ視野が失われていき、失明します。残念ですが、緑内障は現在治す方法は

ありません。これ以上悪くならないための治療をしながら、ずっと付き合っていくしかないんです」と言われたのです。

ショックでした。私は現在40歳。人生まだまだこれから、という年齢です。また、私は金光教の教会の教師をしており、教会の青少年育成活動の一環で、ソフトボールやバスケットボール、ブラスバンドや空手などに力を入れており、これからますます充実させていこうと思っていた矢先で、どれもこれも視力を失う訳にはいかないものばっかり。いや、それどころか、普通の生活を送ることすら出来なくなってしまうのではないかと不安に襲われました。

帰る道すがら、車を走らせながら、「これから、どうなるんだろう…」と私の心は揺れ動いていました。

私は金光教の教会に生まれ育ちましたので、「人はみんな神様に幸せを願われて命を頂いている。一人ひとりに、掛け替えのない神様の願いがかけられているんだよ」と教えられて育ちました。そして、「うれしいことも、悲しいことも、つらいことも、自分の上に起きてくることは全部、神様の助かってくれ、幸せになってくれ、という願いの中で起きてくるもの。無駄なことは一つもないんだから、その時、その事柄があなたに必要なんだから、そのことを通して成長するよう、神様にお願いしながらしっかり受け止めていくんだよ」と教えられてきました。

だからでしょうか、沈んだ気持ちの中で、ふと、「待てよ。これは神様から私への何かのサインじゃ

ないのかな」という思いがわいてきたのです。

私は小さい頃から近眼がひどく、目に映る景色はいつもぼんやりしたものでした。ですから、高校生になり、初めてコンタクトレンズを入れた時は「世界ってこんなに美しかったんだ！」と驚き、ただ眼に映るものを眺めているだけでも新鮮でわくわくし、「こんなに見えるなんて、何て幸せなんだろう」と喜びと感謝の気持ちでいっぱいになったものでした。「見えてる」ことはすごい大変な、びっくりするような出来事だったのです。それがいつの間にか当たり前になり、私の眼には、あの時と変わらない同じ景色が映っているのに、何も感じなくなっていました。

そういえば、小さい頃は毎日がとても新鮮で、いろんなことを喜び、心が生き生きしていたような気がします。

学校から帰ると、自分が大好きなカレーやハンバーグを母が作っていてくれた時。誕生日に家族みんなで祝福してもらった時。新しい服を着せてもらった時。　親や先生に「頑張ったね」と褒められた時・・・。あの頃は、なんであんなに楽しくて、あんなことがあれほどうれしかったのだろう？　だんだん年を重ね、成長してきたはずなのに、私は今、あの時よりもわくわくして生きているだろうか？

もともと、感動し、感謝して喜べるみずみずしい心を神様からもらって生まれてきているはずなのに、自分はどれだけそれを勝手に曇らせ、貧しいものにしてきてしまってきたのだろうか・・・。考え

ていくと、生活の中で目の前のことばかりに気をとられて、幸せに生き生きと生きていくための一番の必須条件、土台となる「自分の心」がグラグラしている自分の姿が見えてきたのです。

今回のことは、神様が「おいおい、大事なことを忘れてないかい？」とサインを送って下さったような気がしてならないのです。

数年前、私が奉仕する教会にお参りする青年がトラックにはねられるという事故が起こりました。何日も意識不明で、意識が戻ってからも何カ月もベッドで寝たきりでした。退院した彼が教会へお参りに来た時、枯れ枝のようにやせ細ってしまった体でヨロヨロと歩いて来て、「先生、『生かされて生きる』っていう意味が分かりましたよ。目が覚めるって、手足が動くってこんなにありがたいことだったんですね」と言って、にっこり笑ったのです。

私の眼どころの話じゃありません。命があること自体を毎日心から感謝して、喜んで生きている彼の人生はどれほど濃く、喜びと輝きに満ちあふれたものでしょうか。考えてみれば、命があること、日々何事もなく暮らしていること、どれも当たり前のことなんか一つもなく、まさに私の命は生かされている命だったことに気づかされたのでした。

私は緑内障と診断されたおかげで、いろんなことを考えさせられ、忘れてしまっていた大事なことを思い出すことが出来ました。毎日一回、寝る前に必ず治療薬の目薬を差さなければならないのですが、その時が改めて感謝の心を思い起こす時間です。「今

日もよく見えて、生活にも支障なくてありがとうございました」と感謝します。

そんな毎日の中、見えている景色がまた輝きを取り戻してきたような気がします。この緑内障は、私が生かされている命に、感謝する心をいつも忘れずに幸せに生きるために、神様が下さった「お守り」のようなものだと思うのです。

これから生きていく中で、もっともっといろんなことが起きてくるでしょう。何の問題もなく一生を過ごす人はいないと思います。でも、どんなつらいことも悲しいことも、意味のないことは一つもなく、起きてくることすべてが、もっともっと幸せに生きていける自分になるために神様から与えられたものだと思うんです。

きょうも目薬を差しながら一日を振り返り、喜びと感謝の心を忘れないように生きていきたいと思うのです。

お礼の心

三宅　史子

一昨年の夏、私は待ちに待った第一子を出産させて頂きました。「おぎゃー！」と元気に泣いた声を今でもハッキリと覚えています。赤ちゃんが生まれて、実際に目にするまで、自分のお腹に新しい命があるということが何だかとても信じられませんでした。

一つのいのちが誕生するということは、とても不思議です。自分が意識して子どもを育てるわけではないのに、目に見えないほど小さかった命がお腹の中で少しずつ成長し、10カ月もすると一人の人間として生まれてくるのです。私たち一人ひとりは皆、神様からいのちを与えられて、この世に誕生します。

息子が1歳の誕生日を迎える頃のことです。同じ年頃の赤ちゃんがいる友達はすでにお乳を止めていたり、止める計画をしていたり、また、育児雑誌でもお乳を止めるという断乳の記事を目にすると、私もそろそろお乳を卒業させようと思うようになりました。

というのも、生まれてからこれまで、2、3時間おきに授乳をしていたので、お昼も一人で遠くに出かけたり、夜もぐっすりと眠ることが出来ないのです。最近では、日中はご飯を食べるようになって、授乳の回数も減ってはきたものの、夜中はそうはいきません。

やっと寝付いたかと思うと、「えーん」と泣き出し、また授乳して寝かしつけるということが何度もあります。特に私が疲れている時は「もう、また目を覚ましたの…」という気持ちになります。そして、少しずつ授乳の回数を減らそうと思った時に限って、よく目を覚ますのです。

「何で、もっとぐっすり眠ってくれないの！」とイライラしながら息子に問い掛けますが、ただただ泣くばかりです。仕方なくもう一度お乳をあげながら、私は、息子の顔をしばらく見つめていました。そうすると、これまでのことが思い出されてきました。

生まれてしばらくは、なかなかお乳が出なくて悩みました。

ある日、とても体がだるく、発熱し、風邪でも引いたのかと思っていると、胸がパンパンに腫れて痛くなり、ベッドに横たわることも起き上がることも出来なくなってしまいました。「これはおかしい」と、這（は）うようにして病院へ行き、診察を受けると、乳腺炎であることが分かりました。涙の出るほど痛いマッサージを受け、食事についての指導を受けました。病院から帰ると母がお乳に良いように、野菜たっぷりの食事を作ってくれました。母の味はとても温かく、体に染み渡るようでした。

これまで当たり前のようにして食べていた食事は、母が家族のことを思い、心を込めて毎日作ってくれていたのだということや、ずっと両親の愛情を受けながら、育ててもらっていたのだということを

改めて感じ、心から感謝せずにはおれませんでした。おかげでだんだんと体調が戻り、母乳で子どもを育てることが出来るようになり、息子は、大きな病気をすることもなく、今日まですくすくと成長させて頂きました。

この一年を振り返り、そのようなことを懐かしく思い出していると、ふと、四代金光様が詠まれたお歌が心によみがえってきました。

できないと　悲しむよりも　できること　喜ぶべきとまたしても思う

それはまさになかなかお乳を卒業出来ないと悩んでいる私自身のことを言われているのだと気付きました。

神様からいのちを授かり、お腹の中で無事10カ月間育てて頂いたこと。そして元気に出産出来たこと。小さいからまだ言葉の意味は分からないだろうと思っていると、想像以上によく理解していたり、昨日まで出来なかったことが急に一人で出来るようになったりと、日々、子どもが健康で成長し、子どもと接する毎日の中でたくさんの喜びを頂いていること、そしてここまで十分にお乳も出、親子共に健康で過ごさせて頂けていることなど、なぜもっと感謝出来なかったのか…。まず、もっとお礼を申し上げなくてはならないことがたくさんあったという思いになりました。

これまでのことにしっかりとお礼を申し上げ、そ

してここから先のことをお願いさせてもらわなければならない。出来ていないことばかり思い悩んで、出来ている、させて頂けたことに感謝をする生活になっていなかった…と、今までの自分を省みることが出来ました。

不満や不足の心で過ごすと、知らず知らずのうちにその心は言葉や態度に現れます。子どもに接する親の心は、そのまま子どもに伝わるのです。また、子どもは親の背中を見て育つと言われるように、手本であるはずの親が、不足ばかり言っていたら、子どもの純粋な心に影となって残ってしまうのではないでしょうか。

不足の心になっていないか、子どもの良いお手本になっているかと、私はいつも心に問い掛けています。

どんなに疲れていても、子どもの満面の笑みや、ぐっすりと眠っている姿は、本当に心が安らぎます。お乳を飲みながら、安心してスヤスヤと眠るわが子に、母親としての幸せを感じ、胸がいっぱいになります。

まだ育児は始まったばかりですが、神様からお預かりしている大切ないのちのお世話をさせてもらう中で、喜んで生活させて頂く姿を子どもに見てもらいたいと、願っています。

これから子どもが成長し、人を思いやる優しい心を持ち、世の中や人のお役に立つ人間となってくれるよう、日々神様にお願いしながら、子どもと共に育っていきたいと思います。

今一番大切なこと

谷口　余志子

私は毎日、ご近所の仲間3人と、夕方45分ほど散歩しています。大自然に包まれた日本最後の清流と言われる四万十川の流域を、テクテク歩いて今年で9年目を迎えようとしています。

時の流れは行き交う人も周囲の風景も変えていきます。季節の移り変わりを目で見、耳で聞き、鼻で嗅（か）いで楽しませてもらっています。

夜空を仰ぐと時には山の峰から月が顔を出し、辺りを耿耿（こうこう）と照らします。

秋になると足元では虫たちの奏でる音色が合奏に聞こえ、応援のリズムとなって一層足取りを軽くしてくれます。道の両脇には草花や木々が色とりどりの花を咲かせて気持ちを和ませてくれるのです。

この散歩の時間は、まさに天と地の間で、動植物と共に、時の流れに寄り添って生かせてもらっている私なのだと、深く実感させられ、天地の恵みがありがたく、手を合わせてお礼を申す時でもあります。

歩きながら、ふと今から15年前、96歳でお亡くなりになった田中さんのことを思います。

この方は私の奉仕する金光教の教会にお参りをされ、口を開けばいつも、「ありがたい」と言われる方でした。若いころから畑仕事が日課で、日の出と共に畑に出掛け、日没まで土を撫（な）でるようにして野菜作りをされていました。作物にも言葉をか

けながら虫の駆除も手作業でされていました。

この方は土を「お土」と呼び、特別な思い入れがありました。

子どものころ、田中さんの父親は、ある方の保証人になったことで、大きな負債を抱えることになりました。しかし、相手を憎むこともなく返済のために夜暗くなっても火を焚（た）いてまで、一生懸命に畑仕事をしていました。自分の徳を積むこととして取り組んでいたその父親の姿を見ながら育ってきましたので、田中さんにとっても精魂を込めた畑仕事でした。

ある時こんなことを言われたのです。

「私は『お土』を触ると、今は満潮であるか、干潮であるかが分かります」

田中さんが畑仕事をしている場所は、海抜２００メートルもある山に囲まれた台地なのです。よくこの辺りの人は榊（さかき）の木を切る時は、日持ちするということで満潮の時間に合わせますが、田中さんは肌で感じる予報士ですから重宝がられます。

ある人が畑の近くを通り掛かったところ、田中さんが鍬（くわ）を打ち込んだまま動かなくなっていました。びっくりしてそばに駆け寄ったところ、まあー、気持ち良さそうにスヤスヤ眠っているのです。

「なんと器用な人よ。畑が寝床かよ」と後々までの語り草になっています。

「田中さんに用事があれば家に行くより畑に行ってみいや」と言われるほど、一日中、土にうずくまり、野菜や虫を相手に過ごしていたのです。

田中さんにとって畑仕事は、天地のお働き、「太陽の光と熱・空気・お水・お土地」、これらの恵みを十分に頂き、心安まる時間であったのです。

田中さんはよく話していました。「野菜はこの天地の恩恵によって作らせて頂いたもので、自分はその手助けをさせてもらっているだけのこと。それなのに、たくさん収穫させてもらい、生命を繋げてもらっている」と。

そして、収穫した野菜は一番に神様にお供えされていました。神様に作らせていただいたというお礼の気持ちが厚い方でありました。たくさん出来た時は人にもお分けすると、「田中さんの野菜はおいしい」と人気がありました。それはお土地の恩を頂き切っておられた方だからなのでしょう。

世間の人は、雨が長く続くと「降り腐る」、そして、日照りが続くと「照り腐る」と不足を言う人もいますが、田中さんは違います。長雨で畑が冠水しても、日照りで水不足になろうとも、「これは全て天地のお働きのなさること。無力な人間はありのまま受け入れることです」と、黙々と愚痴もこぼさず畑仕事を楽しんでおられたのです。

時々息子さんが畑仕事を手伝っていましたが、田中さんは、「あんないい加減なことでは作物はよう出来ん。心が入っとらん！」と言っていました。

心を込めて天地の恩に感謝して行う畑仕事との違いを戒めておられたのでしょう。

私たち人間は天と地の間で生かされて生きております。私たちはこのお働きなくしては生きていかれ

ないのです。人間の心臓が絶え間なく動いているのは、天地のお働きがあってのこと。このお働きそのものが神様なのです。

私も朝、目が覚めましたら、夜中お守り頂いたことのお礼を申して、今日新たな命を頂いていることを喜ばせてもらい、今日一日は新たな日とし、ありがたい気持ちで生活させてもらいたい。昨日お礼申したから今日はいらないでは済まされないのです。毎日食事を頂かないと生きていけないように、今日一日のお願いもお礼も新たなのです。

私は、田中さんの生きる姿勢に触れ、お礼を申して生活させてもらうことの大切さを改めて気付かされました。

「今日も、『おはようございます』とありがたく目覚めることが出来たかな？『いただきます』と心を込め、手を合わせて食事を頂けたかな？　人にも物にも、心から『ありがとう』と言えたかな？」と自分に尋ねながら、共に歩く仲間に「この美しい天地の恵みの中を、こうして無事に健康で、テクテク歩くことが出来るのは奇跡よね」と、お礼を申さずにはいられないのです。

KONKOKYO

金光教本部　ラジオ放送係

【住所】〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷 320
【電話】0865-42-6453
【FAX】0865-42-2114
【メール】w-master@konkokyo.or.jp